経　営　論　集
50巻　第　2　号
2003年1月

社会的構成主義と組織論

高橋　正泰

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．社会的構成主義の基本的スタンス
1．モダンからポストモダンへ－ポスト構造主義の意味と社会的構成主義－
2．ConstructionismとConstructivism
3．社会的構成主義とディスコース
Ⅲ．組織論における社会的構成主義の影響
1．社会的構成主義の組織論への展開
2．組織の科学的説明としてのディスコース
3．論理的科学思考と物語的思考
Ⅳ．結びにかえて

Ⅰ．はじめに

社会科学の研究においても，近年，多くの新しい考え方が生まれてきている。社会的構成主義（social constructionism）もその一つである。このようなアプローチは，「ディスコース分析」，「脱構築」，「ポスト構造主義」といった表現で行われてきている（e.g., Burr, 1995; 高橋, 2002）。20世紀を特徴づけるモダニズムに対して，その挑戦であるポストモダニズムに社会的構成主義は位置づけられる。その基本的視点は，社会を規定する客観性や社会の深層にある法則性，そして究極的な真理の探究というパラダイムに挑戦することにみることができる。社会的相互作用を通して自分自身およびお互いのアイデンティティを構築するという見方を，Mead（1934）が提唱したのは今から70年あまり前になるが，その後，この考え方に従って社

会生活の構築過程を明らかにしようとする社会学の下位分野に位置づけられるエスノメソドロジーが1950年代から60年代に誕生した。心理学の分野で社会的構成主義を本格的に提唱したのはGergen（1973）であり，Gergen & Gergen（1984, 1986），Gergen（1985），およびSarbin（1986）が大きな貢献をしている。さらに，社会学ではその基本的な考え方は知識社会学を展開したBerger & Luckmann（1966）に遡ることが出来よう。現実が社会的に構成されるとすれば，社会システムとしての組織もまた社会的に構成されるといえる。このような「組織が社会的に構成される」という主張は，組織シンボリズムや組織文化論においてすでに主張されているところであるが，さらに社会的構成主義として展開されつつある意味を探ることが必要である。

このような理論の歴史的背景を念頭に置いて社会的構成主義について考察し，組織の理論にとってどのような意味があり，そして貢献ができるかを検討することが本論文の目的である。

Ⅱ．社会的構成主義の基本的スタンス

1．モダンからポストモダンへ―ポスト構造主義の意味と社会的構成主義―

社会的構成主義は，ポストモダニズムとポスト構造主義を背景にしている。モダニズムは，18世紀中頃から始まる啓蒙思想による知的ならびに芸術的運動の具体化としての知的運動の歴史をもつとされ，それはそれ以前の世界，いわゆる暗黒の封建時代とか，神々の世界に対する懐疑的挑戦であった。それに対し，現在，議論されているポストモダニズムの契機は，ニュー・サイエンスや1970年代から始まる建築学や芸術，文芸批判に見出すことが出来よう。その基本的スタンスは，モダニズムの基本的な諸前提への問題提起とその諸前提の否定である。ポストモダニズムでは，実存世界の諸形態の裏に潜む法則や構造を考える構造主義は否定され，したがって，究極的真理が存在し，見える世界は隠れた構造の結果であるという考え方も否定されることを意味している（Burr, 1995: 12-14，訳18-22）。それ故，グランド・セオリーとかメタ理論により世界が理解されるとか，説明されると考えることはあり得ないのである。

世界の隠れた構造や法則性が現実として表れてきている特徴の裏に潜んでおり，その深層の実在を探究し，その構造の分析を行うことによって世界の真理を見出そうとする構造主義のパースペクティブは，モダニズムの基本的な立場である。それ故，社会的構成主義は「実在世界の諸形態の裏に潜む法則や構造」を否定する「ポスト構造主義」ともいわれる。

とすれば，社会的構成主義とはどのような考え方をするのであろうか。Burr（1995）によると，社会的構成主義の立場を特定化する唯一の特徴は存在しないとされる。つまり，いくつかの重要な諸仮定をもつものが社会的構成主義に分類されるのである（Gergen, 1985）。その諸

仮定とは，(1) 自明の知識への批判的スタンス，(2) 歴史的及び文化的な特殊性，(3) 知識は社会過程によって支えられる，(4) 知識と社会的行為は相伴う，である（Burr, 1995: 3-5，訳4-7)。

(1) 自明の知識への批判的スタンス

社会的構成主義では，「世界のありのままは観察によって明らかにされ，存在するものはわれわれが存在すると＜知覚する＞ものにほかならないという前提，これに反対する」(Burr, 1995: 3，訳4) のである。つまり，世界が存在すると見える，その見え方の前提を，社会的構成主義は絶えず疑うようなスタンスを基本としている。われわれが世界を区分する仕方は，必ずしも実在するカテゴリーを示すものではないということである。ジェンダーの問題は，その典型である。

(2) 歴史的及び文化的な特殊性

社会的構成主義は，通常われわれが使用する理解の仕方，そしてわれわれが使うカテゴリーや概念は，歴史的および文化的に特殊なものであるという認識を要求する。ジェンダーや子供に対する扱い方，過去や未来というカテゴリーによる世界の理解は，その人がどこに暮らし，どのような成長を遂げるかという，何時何処でか，に依存する。ジェンダーや子供に対する見方は，歴史的に見ても急速に変化してきている。このように，あらゆる理解の仕方は歴史的及び文化的に相対的なものであるばかりか，それらの理解の仕方は特定の文化や歴史的背景の所産でもあることを意味している。したがって，科学的な理解も含めどれが優れていてどれが劣るというようなことを仮定すべきではないとされる。

(3) 知識は社会過程によって支えられる

世界についての知識や理解の仕方は，実在するありのままの世界からきているのではなく，それらは人々がお互いに協力して構築すると社会的構成主義者は主張する。知識は社会生活における人々の日常的相互作用を通じて作り上げられるのである。したがって，社会的相互作用のなかでとりわけ言語は重要であり，社会的構成主義者はディスコースに興味を注ぐのである。「真理」は世界の客観的な観察の所産ではなく，人々による社会過程及び社会的相互作用の所産なのであって，歴史そして文化によってかわるものと見なされる。

(4) 知識と社会的行為は相伴う

世界の社会的構成はきわめて多様な形態をとり，これらはまた多様な異なる人間の行為を生

み出し，またもたらす。その意味は，同じ行為であったとしても世界の記述ないし構成により，ある特定の社会的行為を支持し，他のそれを退けるのである。例えば酔っぱらいの行動は非難の対象とみられ，酒浸りは犯罪であり投獄の対応となる。しかし，「アルコール中毒」とみるならば，一種の薬物中毒であり，犯罪や投獄ではなく，医学的および心理的治療の対象となるのである。

これらの特徴を要約すると，①世界は社会過程の所産であるのでその世界のあり方は一定ではなく，それらの内部にある「本質」は存在しないという反本質主義，②知識は実在の直接の知覚であること，つまり客観的事実を否定する反実在論，③あらゆる知識が歴史的および文化的に影響されるのであれば，社会科学によって生み出された知識も当然含まれるとする知識の歴史的文化的特殊性，④われわれが生まれ出る世界には人々が使っている概念枠やカテゴリーがすでに存在しており，人々の考え方は言語媒介として獲得されるとする思考前提としての言語の重要性，そして⑤世界は人々の話し合いにより構築されるとする社会的行為の一形態としての言語，社会構造というより相互作用と社会的慣行への注目と知識や形態がどのように人々の相互作用の中で生まれるかというプロセスの重視，等をあげることができる（Burr, 1995: 5-8, 訳8-12)。社会的構成主義では，個人よりも人間関係のネットワークが強調され，解釈学をはじめとしてシステム論などの諸領域においても伝統的な科学方法論の絶対的優位性を主張してきた立場に対して異議を唱える（McNamee & Gergen, 1992: 5, 訳22)。それ故に，社会的構成主義は社会科学の研究に対して根底から異なるモデルを提示し，主張することになるのである。

2. Constructionism と Constructivism

constructionisim と constructivism という用語は，互換的に用いられたり同義語のように使われたりしている。その日本語としても，social constructionism は社会的構成主義，社会構成主義，社会的構築主義などとして翻訳されている。しかし，constructionisim と constructivism という言葉は全くの同義ではなく，若干の違いを指摘しなければならない。

第一に，ここでは，この二つの用語をそれぞれ social constructionisim[1] を社会的構成主義，そして constructivism を構築主義として区別することにしたい。両者はともに「ポスト構造主義」「ポストモダニズム」の立場に立ち，その実在や究極的真理を否定するが，世界もしくは現実がどのように創られていくかについて見方が異なっている。Hoffman（1992: 8, 訳25）によれば，社会的構成主義は考えや観念や記憶が，人々の社会的交流から生まれ，言語に媒介されると考え，すべての知識は人々の間にある空間で発展し，「共通の世界（common world)」，

あるいは「共通のダンス（common dance)」と呼びうる領域で発展すると考えるのである。他方，構築主義は閉鎖的な神経系のイメージに傾いており，認識と概念は人々が環境と衝突するときに形づけられるという，いわば人間の内的構造を重視している。

端的に言うと，社会的構成主義と構築主義は，世界は実在しており，客観的な確かさを持って認識しうるという近代主義的な考え方に疑問をもつ点では共通するが，どこで世界が創られるかという点で異なっている。つまり，社会的構成主義では世界はあくまでも人々の共有する関係の中で構成され創られていくと考えるのに対し，構築主義では世界は最終的に人間個人の頭の中で構築されていくと考えているということができる。社会構成主義は，個人よりも人間関係のネットワークに焦点を合わせているのである（McNamee & Gergen , 1992: 5, 訳22)。

3. 社会的構成主義とディスコース

(1) ディスコースの本質

ディスコースは本質的に難しい問題を含んでいるが，ディスコースはポストモダンの研究では重要な役割を果たしており，研究領域の分析タイプやスタイル，そして理論や概念によって大きく影響される（e.g.,高橋,2002)。しかし，ディスコースが含む言語，会話，物語は，社会を理解するための不可欠であるといえる。Parkerは，ディスコースを「対象を構築する記述の体系」(1992: 5）とし，またBurrは「ディスコースとは，何らかの仕方でまとまって，出来事の特定のヴァージョンを生み出す一群の意味，メタファー，表象，イメージ，ストーリー，陳述，等々を指している」(1995:48，訳74）と定義づけている。つまり，ディスコースが意味していることは，一つの出来事を描写する特定の方法，つまりある観点から表現する特定の仕方なのである。すべての対象，出来事，人について異なるディスコースが存在するのであり，それぞれの対象には，それを語る異なるストーリーやそれを世界（社会）に反映する異なるやり方が存在するということである。

つまり，それぞれのディスコースは，異なる側面に注目し，異なる問題を提起し，われわれが行うべきことについての異なる意味を含んでいるのであり，異なる仕方で表現し構築しようとするのである。それ故に，ディスコースは言われたり書かれたり，また他の方法で表現されるものを通して世界の現象を構成することになる。そして，それはまた異なるディスコースは，対象を他とは極めて異なる「特質」を描くことになるのである。

したがってディスコース分析は，さまざまな目標や理論的背景をもつ，きわめて多様な研究慣行を包含していることになる。また，この分析方法は社会的構成主義の研究に大きな影響を与えているが（Potter et al., 1990)，社会的構成主義の理論的立場として，必ずしもディスコース分析のアプローチをとらなければならないということを意味しているわけではないし，その

逆も意味してはいない。理論的パースペクティブとしての社会的構成主義と社会調査を行うアプローチとしてのディスコース分析は，一対一では対応していない。しかし，ディスコース分析は，社会科学研究における伝統的な大半の方法とは似ていないのである。というのは，ディスコース分析自体の特質が，主観的で解釈的だからである。

(2) 社会的構成主義での言語

言語は，社会的構成主義を理解するためには必須の概念である。人々が社会的に構成されていくという過程は，言語に根ざしているという見方であり，それが社会的構成主義である。しかし，この言語観は固定的で恒常的ではなく，言語の意味は絶えず変化するというポスト構造主義が，社会的構成主義の本質である。

伝統的な言語観では，言語は人間を表現する手段であるとみなされてきた。しかし，社会的構成主義では「人を生み出すものが言語にほかならない」(Burr, 1995: 33，訳52) とみなされる。つまり，言語自体が，自分自身と世界の経験を構造化する仕方をもたらすのであり，言語が人の思考を決めるのである。われわれが使う概念は，言語によって作られ，言語に先立つことはないとすれば，特定の概念を表現する言語がなければ，その言語を話す人々はその概念を用いることは出来ないのである。そのことは，われわれは自己と世界について，さまざまな理解の仕方が存在することを示唆している。言語はわれわれの思考や感情を他者に伝達する単なる媒介ではなく，人や世界のアイデンティティを構成するそのものなのである。

Sausuure (1974) の構造言語学的研究からすると，記号自体は固有の意味を持つわけではないが，Sausuureが記号に二つの要素，すなわち「能記（語られる音声)」と「所記（概念)」との間の恣意的関連を主張することは，記号としての言語が，世界を恣意的に分類することを意味しているのである。われわれの使用する言語は，恣意的な意味を持つものではあるが，ひとたび言葉に特定の意味が付与されると，その意味はその関係において固定化され，同一の言葉はいつも同じ意味を持つことになる。しかし，この立場では，時によって言葉の意味は変化すること，そしてそれがどのように変わるかを説明できないこと，さらに数多くの意味をどのようにして言葉が持つのかを説明することはできない。ここに注目したのが，ポスト構造主義である。

構造主義とポスト構造主義は，ともに①言語を，人を構築する最も重要な場と見ていること，②反ヒューマニズム[2] の立場，を共有している (Burr, 1995: 39-41，訳61-64)。しかし，構造主義とポスト構造主義が異なるのは，語に付随する意味が固定化されず文脈によって変化するという点である。人々が話し，書くことはその行為（社会的慣行）と切り離すことは出来ないし，社会が構造化される仕方とも切り離せないのであり，したがって，ポスト構造主義は，言

語をコンフリクトや個人的ならびに社会的変化の場と見なしているということである。言語と思考は切り離せないのであり，言語はあらゆる思考の基礎を提供している。自己は，言語と社会的相互作用の所産であると見なすことが出来るならば，人は誰と，どのような環境で，何の目的か，によって絶えず変化するのであって，意味が固定化されることはないのである。

(3) 社会的構成主義の物語とストーリー

Epston, White & Murray (1992) によれば，世界についての知識は経験を通してのみ獲得しているのであって，人は物事を直接的に理解したり，客観的に記述したりすることは出来ない。人は自分の経験から世界を語るのであり，それが「知る」ということの限界でもある。ストーリーこそが，人々の生々しい経験を秩序立てて理解するための基本的枠組みを提供するとするならば，現実はこうした物語やストーリーを通して解釈されることになる。例えば，人が組織について語るとき，そこにあるストーリーによって出来事が時間軸上に並べられ，過去から現在への出来事の変化や進展をひとまとまりの物語として描くことになる。これによって，進行中の組織活動からある一コマを切り取って現実という一つの塊として，その中に意味を見つけようとするのである。したがって，ある組織の現実がいかなる意味を持つかは，自己の持っているストーリーによって決定されるのであり，その切り取り方や現実の表現もまたストーリーによって決定されるのである。

このように具体化されるストーリーの中にこそ真実がある，という信憑性は，客観的立場をとるものにとっては受け容れがたいことかもしれない。なぜならば，ストーリーは不確定な要素を含んでいるのである。どんな話にもある種の曖昧さや不確定性，そして矛盾が含まれているものである。それ故に，自己の持っている知識を総動員して現実としての物語とストーリーを解釈することによって，これまでのストーリーを調整し，新たな意味を現実に付与していくことになる。このような意味を付与するプロセスは，経験を整理し，時間的流れの中に当てはめ，現実のもつ特徴を見出していくことなのである。

物語の真実は「事実」の中にあるのではなく，物語の意味の中にこそあるのである。ディスコースとしての物語は事実を描くこともあれば，そうでないときもある。物語のストーリーは，それ自体真実でもなければ，誤りであるわけではない。もしも事実を全く無視したストーリーが物語で描かれるとしても，それは結果として意味を生み出すことになるかもしれない。物語とストーリーは，社会的コンテクストの中で位置づけられることになり，社会的関係を創造し，維持し，変容させることになるのである。まさに，世界は，ディスコースとしての物語とストーリーによって社会的に構成されるのである。

Ⅲ. 組織論における社会的構成主義の影響

1. 社会的構成主義の組織論への展開

20世紀は，近代科学とそれに結びついたテクノロジーにより工業化された社会として，歴史的に見てもこれまでに実現したことのない物質的に豊かな世界であった。このモダンと称される世界は，標準化，規格化，同時化，集中化，極大化，均一化，そして発展により特徴づけられる。神話化された科学的合理性は客観的基準となり，経営学ではTaylor（1903, 1911）の科学的管理法に代表される生産性や能率の概念が，無条件で広く受け入れられてきた。このような機能主義的な組織論が経営学では研究され，その成果はBarnard（1938），Simon（1957），March & Simon（1958）を経て，コンティンジェンシー理論の展開として多くの優れた研究成果を上げることが出来た。しかしながら，1980年代からこのような機能主義的組織論に対する批判がおこり，文化論や社会学，文化人類学の影響を受けた組織シンボリズムに代表されるような，解釈的な研究アプローチが展開されるようになったのである（Pondy et al., 1983; 高橋，1998; 坂下2002）。

機能主義的な組織論の特徴は，その法則定立性の追究と客観的立場である。世界は確固たる実存であり，構造を持ち，ある一定の法則に基づいて機能的に動いていると暗黙のうちに措定されてきた。したがって，組織論の主要な研究テーマは必然的に組織現象をもたらす根本的な法則性と構造，そして機能の探究となってきた。しかしながら，一部では人間関係論に見られるように社会システムとしての組織という観点からの研究も続けられてきており，その研究テーマは機能主義的な観点からではなくていわゆる文化論的な観点へと研究方法やテーマが変化してきたことも事実である。Silverman（1970）の機能主義的組織論批判にみられるように，組織の行為や主体性が問題となり，さらに組織変革論の台頭とあいまって組織自身の変化を扱う自己組織性や複雑系の自己組織化など，多くの新しい考え方が認められきている。この中にあって，心理学や社会学で議論されてきた社会的構成主義の立場もまた，新たなパラダイムの変換を組織論に迫ってきているのである。

このポストモダン組織論というべき研究は，組織シンボリズム論の展開とともに，組織の新しい研究パラダイムとして一分野を形成しつつある。

2. 組織の科学的説明としてのディスコース

社会的構成主義におけるディスコース，つまり組織のディスコースについての研究には，社会学，心理学，文化人類学，言語学，そして哲学など，その学際的な起源と性格から多様な異なったパースペクティブや方法論が混在している。このことは，組織研究でのディスコース・

アプローチの可能性と分析的手掛かりを提供している。少なくとも，組織論では組織の理解をより豊かにするために，組織とそのメンバーの行動のディスコースおよびそのディスコースがいかに組織化のプロセスに組み込まれるか，ということを考察しなければならないのである。

言語，話し，物語，会話としてのディスコースは，一般的日常生活における不可欠な特徴であり，組織の相互作用の本質でもある。日常の態度や行動は，現実であると信じていることを認識し，それにしたがって形づけられている。ディスコースはまた，単なる記号や表象ではなく，思考様式として認知されなければならない。ディスコースが行われるということは，ある物事を記述すると言うだけでなく，あることを行っており，それは社会的意味合いを持っているのである。ディスコースはテキストの一部であり，社会的実践でもあり，社会的コンテクストの中に位置づけられる（Fairclough, 1992, 1995; van Dijk, 1997a, 1997b）。したがって，ディスコース分析は，以下のことを要求することになる（Grant, Keenoy, & Oswick, 1998: 3）。

①使用される言語の検討（テキストの次元）
②テキストの創出と解釈（ディスカーシブな慣行次元）
③ディスカーシブな出来事を取り巻く制度的そして組織的要因とそれらが当該のディスコースをいかに形成するかという考察

さらに，van Dijk（1997a: 2）は

①使用されるテキストの形式と内容の分析（言語の使用）
②概念や信念を伝達するために人々が言語を使用する方法の評価（信念のコミュニケーション）
③コミュニケーションが生ずる社会的出来事の検討（社会的状況での相互作用）

をあげ，このような「相互テキスト分析」は，テキスト検討を超えて「誰が，いかに，なぜ，そしていつ言語を使用するか」を探求することを可能にしていると指摘している。

しかし，ディスコースとは，実際の社会を抽象的な概念で絵空事として表現する仕方ではない。ディスコースはわれわれのアイデンティティを形成するのであり，また社会のあり方や運営の仕方と密接に関連しているとするならば，組織の理論も同様の論理を受け入れることが可能である。つまり，組織もまたディスコースによって構成され，語られるのである。

もし表象として科学的説明が科学的活動の中に埋め込まれていると考えることが出来るならば，科学という物語の意義は二つの方向性をもつことになる（Gergen & Kaye, 1992: 173-174,

訳196-197)。

(1) 科学の物語は「真実を語る」―予測によって生存を助ける―ではなく，世界を形作る枠組みとしての重要性をもつ。

つまり，科学の物語は，あるものが別のものではありえないとか，あるいは，ある点に関して他のものよりも良いとか悪いとかいう形で現実を規定する。そうすることで，科学の物語は，他ではなくある線に沿ってふるまうことの合理的根拠と正当性をもたらす。たとえば，人間の行為は遺伝的な強制に支配されるという社会生物学者の主張を信ずるのと，人々の行為は無限に変形可能だという学習心理学者の主張を信ずるのとでは，日々の成果が異なっている。それぞれの説明は，いったん信じられれば，ある行為を呼び起こし，他の行為を思いとどまらせる。科学の物語のもつ意義は，それが喚起し合理化し正当化する様式にある。それらは，すでに生きられた人生の反省というよりも未来を形作る原型となるのである。

(2) ＜知の対象から知の表象へ＞というポストモダン的変化は，同時に，正当性の根拠をも変化させる。

モダニストの説明では，科学的記述は一人の人間が生み出すものであり，科学者のたゆまぬ観察によって，すべての人のために洞察が提供される。したがって，科学者は，多かれ少なかれ権威的であり，世界のありようについて熟知しているとされる。しかし，ポストモダンの見方からすれば，科学者の物語に付いていた事実を認定する保証書は取りはずされる。科学者は，ある現象（例えば，「核融合」）を起こす「方法を知っている」かもしれないが，そこで生じたことが「核融合」であるという「事実そのものを知っている」わけではない。それでは科学者に権威を与えるのだろうか。書くことについての約束事が物の言い方を決めると同様に，科学者共同体の社会的な約束事がそのメンバーに権威を与える。つまり，科学者は，特定の話し方を尊重する共同体の内部でのみ正当化できる話し方をする。言いかえれば，科学的言明とは，科学者同士の交渉や競争や協力によって作られる共同体の所産である。ポストモダンの枠組みにおいて，われわれが知識と呼んでいるものはこのような社会的所産にほかならない。

このような考え方は，いわゆる社会科学で頻繁に使用されるパラダイムを意味しているとみることができる。モダニズムにおける物語的説明は，現実を表すものであり，もしも説明が正しければ，適応行動をとるためのガイドラインなる。他方，社会的構成主義の立場をとれば，

物語で使用する言葉が意味をもつのは社会的交流における使用を通してである（Gergen & Kaye, 1992: 177，訳203）が故に，物語の構成は流動的であり続け，状況の変化に開かれている。ストーリーをもつ物語，つまりディスコースによる組織分析が意味を持ってくるのである。

Burrell（1998）が，会社の構成部門や個々のメンバー間の対話や議論のプロセスから，いかにして組織が出現するかを論証しているように，組織は日常会話のネットワークの中で起こる日々の社会的結果なのである。それ故に，管理者がその多元的会話をコントロールしようとしても，完全に達成することはできず，非効率性の根本的原因となるのである。組織が機能するためには，この日常的会話から生ずる潜在的な柔軟さを利用し，自己組織と自省作用の価値を高める必要がある。

3. 論理的科学思考と物語的思考

前節での議論を，論理的科学思考と物語的思考という観点から，もう一度整理してみることが出来る。社会科学の分野において，論理科学的思考の援用やそれに類似する科学理論の産物は，絶えず疑問視されてきていると思われるし，まさにポストモダニズムはその現れであるといえる。人間システムである社会システムでの出来事を理解し，解釈するのに適当であると考えられる思考モードと科学主義の唱える思考モードを検討することは，社会的構成主義による組織分析を考える上での有用性は否定することは出来ない[3)]。

White & Epston（1990: 77-78，訳101）によれば，論理科学的思考モードとは，科学的コミュニティーの中で正当な努力として保証されるべき手続きと習慣を含むものであり，まさに機能主義的組織論が採用してきた方法でもある。つまり，論理科学モードは，一般的な原因を扱い，その確立のためには立証され得る参照枠を保証し，実験的な真実をテストするための手続きを利用し，その言語は，一貫性と矛盾しないことという必要性によって制御されているのである（Bruner, 1986）。他方，物語的思考モードは，現実にそっくりであることによって信頼を得る，良いストーリーによって特徴づけられる。それらは，抽象的で一般的な理論を築き上げるための手続きと慣習には関心はなく，経験についてのある特別な事柄に注意を向けている。普遍的な真実の条件を確立するのでははなく，時間軸の上で出来事をつないでいくのである。物語モードは，確かさではなく，さまざまな見方を導くのである。

(1) 論理科学モード

論理科学モードでは，個人の経験は特殊なものとして排除される。また，論理科学モードは，「自然界における一般法則の誘導や，いかなる場所，いかなる時間においても真実とされる普遍的な事実の世界を構成することが求められる」というその普遍性が故に，時間の次元もまた

排除されることになる。言語は，不確定性と複雑さを減らすべく，質的な記述よりも量的な記述が好まれる。矛盾のない整合性が世界を構成する基準であって，言語の使用は特定の意味を持つことが必要となる。それ故，言語のもつ多義性の危険を減らすために専門用語が発達し，意味の同一性を保証することが求められている。さらに，観察者は観察対象から切り離されて，反対側におかれ，観察対象もしくは被験者は作用される対象である。

(2) 物語モード

物語思考モードでは，経験の特殊性が重要視され，生きた経験が「生きた」考えであり，その経験をつなぎ合わせることにより意味が生まれるとされる。時間の流れに沿って出来事が明らかになり，その過程で成立するストーリーによって物語が構成される。時間は決定的に重要であり，ストーリーは始まりと終わりによって完結するが，その間に時間が流れ，さらに物語は継続するかもしれない。

言語は複雑さや経験の主観性を認めるものであり，多様な見方を包含する世界を作るため多義性が採用される。一つ以上の解釈や読みが可能であるならば，言語材料は増やされ，現実の可能性は広げられる。専門的な描写よりも，普通の言葉，絵画的な描写のユニークな組み合わせにより，物語モードはより探索的なものとなる。観察者は，観察者と観察対象の関係を再定義し，観察者と観察対象は「科学的な」ストーリーの中でその役割を演じることになる。

これらの議論から導き出される結論は，明確である。ポストモダニズムとしての社会的構成主義の立場からすると，物語モードによる思考は，組織の分析や理解，そして組織の再構築に多くの方向性を示唆している。

①組織での生きた経験を重視する。

②生きた経験をつなぎ合わせることにより変化する組織を知覚することが出来る。

③経験の描写と新しいストーリーを構成する日常的言語の使用の有用性とその多義性を重要と認める。

④解釈行為に人が参加することの真価を見出すことが出来る。

⑤物語のストーリーは人々により共同制作され，人々の語りは組織の現実を構成する。そして，ストーリーこそが，生きた現実を秩序立てて理解する基本枠組みを提供するのである。

⑥組織の主体と客体は，物語の中で渾然一体となって役割を演じ，組織のコンフィギュレーションとその活動を描き出す。

このように捉えるならば，組織の社会的構成主義は，まさに絶え間なく変化する組織のコンフィギュレーションを描き出し，生きた組織を理解するパースペクティブであり，物語を通し

て分析するナラティブ・アプローチは，組織分析の有用な方法とみなすことが出来よう。

Ⅳ．結びにかえて

これまで組織の理論は，あまりにも成長と発展のメタファーにこだわり続けてきているように思われる。組織変革は，例えばGreiner（1972）の組織発展の理論やMintzberg（1989）にみられる組織ライフ・サイクルといった理論の延長線上に論じられてきたきらいがある。組織変革に関する組織研究者の思いこみの一つを，発展と成長のメタファーとして表現することが出来よう。組織はその発展と成長の過程で重要な段階に達するとその阻害要因を克服して新たな組織コンフィギュレーションにその様態を変え，さらに発展すると仮定されてきた。また，「予定通りに成長する植物」（Hoffman, 1992: 11，訳32）という生物メタファーも組織の重要なメタファーであった。組織は受け継いだ遺伝子に書き込まれた計画にしたがって成長し，やがては終焉を迎えるが，その遺伝子は新たな組織に受け継がれ，進化し続けるという進化論のメタファーは，まさにそれをあらわしている。このような「生物の内部や組織の内部には予め決定された最適な発展段階がある」というメタファーが，あらゆる問題に対して有効であるという保証はどこにもないのである。

社会的構成主義から組織を眺めると，組織は状況の中に埋め込まれているのであり，社会コンテクストの中で組織がどのようなコンフィギュレーションをとるかは予め設計されているわけではない。組織は社会的に構成されるのであって，常にその存在は相対的であるはずである。また，組織の科学的説明は，科学的活動の中に埋め込まれているのであって，フィクションとは異なってはいるけれども，両者は共に歴史的背景をもつ文化的習慣に依存している。そして，このような習慣が，描き出そうとしている組織の現実の特性を決めるのである[4)]。したがって，組織に関する客観的で体系的な知識，つまり科学によって世界の因果関係を正確に予測することが可能になり，将来を支配する可能性を見出すというモダニストの考えは，もはや説得力を失っているともいえる。

社会的構成主義では，その科学的方法論とその研究対象それ自体のあり方について，従来の科学観とは異なっており，社会もしくは状況に埋め込まれた組織，そして組織に埋め込まれた個人というパースペクティブからは，多くの示唆を得ることが出来よう。ディスコース分析で検討したように，言語，物語，そしてストーリーなど組織分析への有用性を受け入れるならば，ナラティブ・アプローチも有益な組織研究の方法の一つである（e.g., Boje, 2001; Clandinin & Connelly, 2000）。機能的組織論を超克して組織論を再構成するために，社会的構成主義の考え方を十分に理解する必然性がここに存在するといえる。しかし，組織論における社会的構成主

義の研究は，その途についたばかりであり，今後の理論的および方法論的研究を待たなければならない。

(注)

1) 高橋（2002）では，社会的構築主義としたが，ここでは社会的構成主義として議論している。
2) ヒューマニズムとは，多くの西洋哲学に中心的な，人間についての一群の前提を指しており，統合的で，統一的で，合理的な行為者であり，しかも自分自身の経験とその意味の作者である，行為者にほかならないという本質主義的考え方である。詳しくは，Burr（1995: 40，訳63）を参照のこと。
3) ここでの議論はWhite & Epston（1990: 77-84，訳101-107）に基づいている。
4) このような考えは，Gergen & Kaye（1992）から導かれている。

参考文献

Barnard,C.I.（1938）*The Functions of the Executive.* Cambridge, MA: Harvard University Press.（山本安次郎・田杉 競・飯野春樹 訳『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社，1986年）

Berger,P. and T.Luckmann（1966）*The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge.* New York: Doubleday and Co.（山口節郎 訳『日常世界の構成－アイデンティティと社会の弁証法－』新曜社，1977年）

Boje,D.M.（2001）*Narrative Methods for Organizational and Communication Research.* London: Sage.

Bruner,J.（1986）*Actual Minds, Possible Worlds.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Burr,V.（1995）*An Introduction to Social Constructionism.* London:Routledge.（田中一彦 訳『社会的構築主義への招待－言説分析とは何か－』川島書店，1997年）

Burrell, G.（1998） Linearity, control and Death. In D.Grant, T.Keenoy and C.Oswick (Eds.) *Discouse and Organization.* London: Sage.

Clandinin,D.J. and F.M.Connelly（2000）*Narrative Inquiry: Experience and Story in Qualitative Research.* San Francisco: Jossey-Bass Publishers.

Epston,D., M.White and K.Murray（1992）A Proposal for a Re-authoring Therapy: Rose's Revisioning of her Life and a Commentary. In S.McNamee and K.J.Gergen（eds.）, *Therapy as Social Construction.* London: Sage.（野口祐二・野村直樹 訳『ナラティヴ・セラピー－社会構成主義の実践－』金剛出版，1997年）

Fairclough, N.（1992）*Discourse and Social Change.* Cambridge: Polity.

Fairclough, N.（1995）*Critical Discourse Analysis: Papers in the Critical Study of Language.* London: Longman.

Gergen,K.J.（1973）Social Psychology as History. *Journal of Personality and Social Psychology,* 26: 309-320.

Gergen,K.J.（1985）The Social Constructionist Movement in Modern Psychology. *American Psychologist,* 40: 266-275.

Gergen,K.J. and M.M.Gergen（1984）The Social Construction of Narrative Accounts. In K.J.Gergen and M.M.Gergen (eds.), *Historical Social Psychology.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associate.

Gergen,K.J. and M.M.Gergen（1986）Narrative Form and the Construction Psychological Science. In T.R.Sarbin (ed.), *Narrative Psychology: The Storied Nature of Human Conduct.* New York: Praeger.

Gergen,K.J. and J.Kaye（1992）Beyond Narrative in the Negotiation of Therapeutic Meaning. In S.McNamee and K.J.Gergen (eds.), *Therapy as Social Construction. London*: Sage.（野口祐二・野村直樹 訳『ナラティヴ・セラピー－社会構成主義の実践－』金剛出版，1997年）

Grant,D., T.Keenoy, and C.Oswick（1998） Introduction: Organizational Discourse: Of Diversity, Dichotomy and Multi-disciplinarity. In D.Grant, T.Keenoy and C.Oswick (Eds.) *Discouse and Organization.* London: Sage.

Greiner,L.E. (1972) Evolution and Revolution as Organization Grows. *Harvard Business Review,* July-August: 37-46.

Hoffman,L. (1992) A Reflexive Stance for Family Therapy. In S.McNamee and K.J.Gergen (eds.), *Therapy as Social Construction.* London: Sage. (野口祐二・野村直樹 訳『ナラティヴ・セラピー－社会構成主義の実践－』金剛出版, 1997年)

March,J.G. and H.A.Simon (1958) *Organizations.* New York: John Wiley & Sons. (土屋守章 訳『オーガニゼーションズ』ダイヤモンド社, 1977年)

Mead,G.H. (1934) *Mind, Self and Society.* Chicago: University of Chicago Press. (河村 望 訳『精神・自我・社会』人間の科学社, 1995年)

McNamee,S. and K.J.Gergen (1992) *Introduction.* In S.McNamee and K.J.Gergen (eds.), *Therapy as Social Construction.* London: Sage. (野口祐二・野村直樹 訳『ナラティヴ・セラピー－社会構成主義の実践－』金剛出版, 1997年)

Mntzberg,H. (1989) *Mintzberg on Management: Inside our Strange World of Organization.* New York: Free Press. (北野利信 訳『人間感覚のマネジメント－行き過ぎた合理性への抗議－』ダイヤモンド社, 1989年)

Parker, I. (1992) *Discourse Dynamics: Critical Analysis for Social and Individual Psychology.* London: Routledge.

Pondy,L., P.J.Frost, G.Morgan, and T.C.Dandridge (eds.) (1983) *Organizational Symbolism* (Monographs in Organizational Behavior and Industrial Relations). Greenwich, CT: JAI Press.

Potter,J., M.Wetherell, R.Gill, and D.Edwards (1990) Discourse: Noun, Verb or Social Practice?. *Philosophical Psychology,* 3-2: 205-217.

坂下昭宣 (2002)『組織シンボリズム論－論点と方法－』白桃書房.

Sarbin,T.R. (1986) The Narrative as Root Metaphor for Psychology. In T.R.Sarbin (ed.), *Narrative Psychology: The Storied Nature of Human Conduct.* New York: Praeger.

Saussure,F.D. (1974) *Course in General Linguistics.* London: Fontana. (小林英夫 訳『一般言語学講義』岩波書店, 1972年)

Silverman, (1970) *The Teory of Organisations.* London: Heinemann.

Simon,H.A. (1957) *Administrative Behavior* (2nd. ed.) . New York: Macmillan. (松田武彦・高柳 暁・二村敏子 訳『経営行動』ダイヤモンド社, 1965年)

高橋正泰 (1998)『組織シンボリズム－メタファーの組織論－』同文舘.

高橋正泰 (2002)「組織論とディスコース」『経営論集』(明治大学) 第49巻第3・4合併号, pp.67-82.

Taylor,F.W. (1903) *Shop Management.* New York: Harper & Row.

Taylor,F.W. (1911) *The Principles of Scientific Management.* New York: Harper & Row.

van Dijk, T.A. (1997a) The Study of Discourse. In T.A. van Dijk (Ed.) *Discourse as Structure and Process,* Vol. 1. London: Sage.

van Dijk, T.A. (ed.) (1997b) *Discourse as Structure and Process,* Vols 1 and 2. London: Sage.

White,M. and D.Epston (1990) *Narrtive Means to Therapeutic Ends.* New York: W.W.Norton & Company. (小森康永 訳『物語としての家族』金剛出版, 1992年)